原風景の生成に関する研究

A Study on the Value Production of "the Archetypal Landscapes"

吉村 晶子

Akiko YOSHIMURA

Abstract : This paper presents the process and mechanism of the phenomenon in which a person who has moved into a new environment begins to picture the landscape of his or her hometown as "the archetypal landscape". After examining the theoretical framework of this phenomenon, the paper presents a survey of this topic with attention paid to attitude intensity, and considers the processes of formation of and value production of the archetypal landscape. As a result of the work presented here, it was understood that the formation process of the archetypal landscape is one in which "self" and "place" become unified so as to seem to the person as if the landscape is part of his or her being. On the other hand, the production of value of the archetypal landscape was understood as a process through which the totality of the place the person lived in heretofore is viewed as an object; this process typically occurs when the person moves into a new environment. Moreover, it was considered that, in establishing the archetypal landscape, both the processes of formation and value production are necessary. The paper also considers and explains the mechanism behind preservation of self-identity through these processes.

Keywords: *the archetypal landscape, formation, value production, attitude, memory, identity*

キーワード: 原風景, 形成, 生成, 態度, 記憶, アイデンティティ

1. はじめに

本研究は、風景生成研究の立場から、原風景の成立プロセスとそのメカニズムについて考察することを目的とする。

原風景は、大多数の人が肯定的、積極的意味を与え、また対環境態度の基礎となるとされていることなどから、広い研究分野にわたって種々の研究がなされてきた。しかし、これらの既往研究では、原風景の記憶の内容、とりわけ、景観タイプ等の構造を抽出しようとするものは多くみられるものの、その記憶が活性化されるに至るきっかけやしくみについて取り組んだものはほとんどみられず、その生成メカニズムについてはこれまで十分に研究されてきたとは言えない。

そこで、本稿では以下、まず最初に風景生成研究の立場と用語を確認した上で、原風景に関する先行研究を概観し、残されている論点を整理し、次に、その論点に留意して行った原風景調査の結果を分析し、原風景の生成プロセスとメカニズムについて考察を加えることにする。

2. 風景生成研究の立場について

風景とは、客観的物理的対象としての環境（存在）のことではなく、人間と環境との間に何らかの関係性が生じること（現象）であるとしてとらえるならば、発見的な認識が行われるような風景体験は、新たな価値が生成される動態的な変化過程としてとらえることができる。ここで、ある新たな関係性が発生することを「風景生成」¹⁾と呼ぶことにすると、次に述べる点から、風景の成立のためには風景生成の現象が必要不可欠であると言える。すなわち、人間の知覚には通常見慣れたものの知覚を無意識下で自動的に処理しようとする傾向があり、環境としてはそこに存在していても、いったんそれに見慣れると、注意を払ったり意識して眺めたりしなくなる。これは、認知科学等において「自動化」²⁾、現象学において「身体化」³⁾と呼ばれる現象に相当する。しかし、ある時なんらかのきっかけにより、ある環境の様相に注意が向き、

観照⁴⁾されるようになることがある。これは、自動化に対し「非自動化」⁵⁾と呼ばれる現象であり、人間と環境との関係性の変化がそこにみられる。つまり、風景とは、環境が存在しさえすれば無条件で成立するものではなく、人間によって意識され、眺める対象として「対象化」されてはじめて成立するものであるという考え方である。同様の考え方は、これまでも多くの研究者にみられ、体験者の立場や態度、また、それまでの生活経験のありようが風景の見方を決定づけることが繰り返し言及され、「環境」と「風景」は区別されるべきものであり⁶⁾、環境が風景として対象化されるためには没関心的態度が必要である等とされてきた⁷⁾。ここで、これらの研究において体験者の「立場」「態度」「期待」「心の構え」等、様々な用語で呼ばれる、体験者の環境に対する構え方のことを、以下、「かまえ」⁸⁾の用語でとらえることにすると、風景とは、体験者の「かまえ」の変化により見出し出され、生成されるものであるととらえられる。つまりここで強調したいのは、風景生成研究は、環境と人間の反応の対応関係を固定的・普遍的なものとして取り出そうとするのではなく、人間と環境の関係性の変化、すなわち新たな関係性の発生こそが風景現象の本質であるとしてとらえ、その動態に興味を持つ立場にあることである。

以上、風景生成研究の立場と用語について確認したが、この立場に立つ場合、いわゆる「原風景」⁹⁾は興味深い研究対象であると言える。すなわち、先行研究では一般に、原風景は「幼少期に形成されるもの」とされているが（次章参照）、ここで、上記立場に則して考えてみると、原風景とは「幼少期の体験を素材に、後になって生成されたもの」、つまり現場を離れてから風景生成がなされる例であるという可能性を指摘できる。つまり、原風景が記憶されている長期的間には、生活等の変化により環境に対するかまえが変化することも多々あると考えられるため、原風景は、幼少期に確かに見たもの、直接体験したものであっても、その後の生活経験の蓄積のしかたや体験枠組みの変化に応じ、後になって違った形にとらえ直され、新たに生成されたものとして

とらえられる可能性がある。そしてこのようにとらえて妥当であれば、現場を離れてもなおなぜ風景が生成されるのかという問題には研究の余地があり、原風景が生成されるきっかけやメカニズムについて考察することは、これまでノスタルジックに語られがちだった原風景の現象の意味、ひいては原風景研究の意義の明確化に寄与できると考えられる。もちろん、この原風景の生成のような現象は、それが現に起きるものであったとしても、長期の生活の中で起きるものであるから、実験によって取り出せるようなものではなく、したがって、厳密な意味での検証・実証ができるものではない。しかし、本稿では、以上述べてきたことから、得られた限りのデータに基づき原風景を風景生成現象としてとらえるために必要な道具立て（用語および考察枠組み）を整備し、今後の議論に耐えうる形にして問題提起を試みてみたい。

3. 先行研究の概観

原風景に関する研究は、これまで幅広い研究領域においてなされてきており、全体としても質・量ともに既にかなり出揃ってきたと言える。それぞれの研究の性格に応じ、「原風景」の用語定義には幅があるものの、原風景の持ついくつかの基本的性格が多くの研究に共通するものとして示されている。それらはすなわち、

- ① 原風景はほとんど全ての人にみられること
- ② 原風景に多くの人が肯定的・積極の意味を与えていること
- ③ 原風景は対環境態度の基礎となること
- ④ 原風景は幼少期（と青年期）に形成されること

の諸点である。以下、これらを確認しつつ、風景生成研究の観点から検討を加える。

まず、①であるが、高橋らの研究で言及されていることを始め、多くの研究者に共通する見解である¹⁰⁾。しかし、ここで、原風景が「ほとんどの人にみられる」のは、各被験者が既に原風景を生成し意識しているからなのか、それとも調査で回答を求められたためにその趣旨に沿ってその場で過去の記憶を思い出して回答したためなのかという疑問が生じる。実際、“はっきり”した原風景（たとえば、イメージが明確である、想起頻度が高い、聞かれてすぐ迷わず答える、等）と、そうでないものの両者の存在は指摘されており、関根は、地方出身者の原風景がはっきりしていることが彼の1982年の論文の新たな指摘であるとしている¹¹⁾。つまり、原風景に対する態度強度¹²⁾の観点からの検討はそれまで無かったということであり、また、関根の研究を含めたそれ以後の研究においても、このことを明確に指摘し検討を加えた研究はこれまでにない¹³⁾。

次に②についてであるが、多くの研究で、原風景は単なる記憶や思い出でなく、「心のよすがを支え、安定感・安息感の源」となるもの¹⁴⁾、「自分の現在を根底で支える大切なものを発見する」契機¹⁵⁾、また作家にとっては「造形力の源泉」¹⁶⁾となる、というように原風景の機能が言及されている。このため、原風景の想起に伴う感情を調査項目に加える研究は多い。しかし、それらはあくまでも「過去の記憶の想起に伴う感情」としてとらえられており、多くの研究において原風景の持つ未来性の側面が指摘されているにも関わらず¹⁷⁾、原風景を、現在において新たに生成したものとしてとらえそのメカニズムを探ろうとする研究はみあたらない。

③も、多くの研究者の一致するところであり¹⁸⁾、また、これと②をあわせると、計画・設計分野においても原風景を研究する意義が認められることから、この分野においても原風景あるいは「心象風景」の研究がなされてきた。しかしそれらの研究では、分野の性質上、研究目的の設定において原風景等の内容の抽出あるいはその現在の空間体験へ影響の検討に重きが置かれており、原風景の生成メカニズムそのものを探った研究はみあたらない。

最後に、④についてであるが、これまでの原風景研究の被験者の大多数が大学生であり、この結果が幅広い年齢層についても普遍性を持つかどうかを裏付ける調査結果が報告されていないが¹⁹⁾、今のところ、原風景の形成時期を幼少期、あるいは幼少期と青年期（思春期）とすることが一応の共通認識となっていること自体は認めてよいであろう²⁰⁾。ここで、風景生成研究の立場から言えば、原風景の形成時期の厳密な特定よりもむしろ、ある場所での体験が原風景として生成されるまでの経過、すなわち風景が対象化されるために必要な時間経過や契機（体験枠組みの変化等）についての検討の方が、これらがこれまで十分に研究されてきていないことから注目される。つまり風景の成立のためには、よく知られるところの「空間的な『引き』」ばかりでなく、時間的な「引き」も契機となり得るのではないかと予想されるが、しかし、このことについて触れているのは、奥野が、特に幼少期の原風景は後年になるほど懐かしく思い出され、若い頃にはわからなかった風景やイメージの意味がしだいにわかってくと述べている程度であり、それ以上この点について取り組んだ研究はみあたらない。

4. 残された論点の整理

以上の先行研究の概観から、次の2点を、風景生成の観点からみた原風景研究に残された論点としてまとめられよう。

（1）原風景の「形成」と「生成」の区別

まず、原風景の「生成」の現象がそもそもあるものなのかどうかについてであるが、関根も指摘しているように、“はっきり”した原風景を持つ者が存在することから、故郷などの以前生活していた場所の風景が後に明確に意識されるという現象があること自体は、認めてよいであろう。ここで、このような現象を、原風景の「生成」ととらえ、一方、幼少期を中心とする時期に生活していた場所の体験は、原風景の「形成」の過程として区別することを提案したい。つまり、原風景の「形成」とは、後の風景生成の素材となるような感覚や体験の断片が積み上げられる過程、これに対し、原風景の「生成」とは、それが現在の価値観やかまえたもとに、以前とは違うあるひとつの全体像を持つものとして生成され直される過程として考えるということである。この区別をした上で、これまで研究されてこなかった「原風景の生成」とはいかなる過程であるのかを、本稿では検討していく。そこにおいては、原風景の生成をうながすような、すなわち環境に対するかまえを変化させるような契機（時間的な「引き」や体験枠組みの変化等）のありように着目し考察を進める。また、「生成」とは区別されるものとして「形成」について考察することにより、これまで単に「幼少期」とされてきた原風景の「形成」には、他の一般の風景とは区別される「原風景」の生成につながるための、いかなる意味と役割があるかについて検討できるものとする。

（2）態度強度の観点

以上のように原風景の「生成」と「形成」を区別した場合、既往研究が指摘するように「ほとんど全ての人」が、原風景を「形成」してきているとは言えようが、しかし、必ずしも原風景を「生成」しているとは限らないと考えられ、件の“はっきり”した原風景を持つ者などが、原風景を既に「生成」した者としてとらえることができよう。既に原風景を生成したかしていないかは、程度の問題はあるにせよ、態度強度に着目することによってとらえることができると考えられる。逆に言えば、原風景についての態度強度に着目することは、原風景の「生成」という現象を検出するために有効であると考えられ、このような検討はこれまでにないこと、また内容とともに強度を採取することが調査をより正確なものにすると考えられることから、その意義を認められよう。

以上（1）（2）より、被験者の居住歴や生活体験とその変化、原風景の想起状況とその内容、および原風景に対する態度強度な

どに着目した原風景の調査分析を行うという方針が得られた。

5. 原風景調査の概要

前章で得られた方針に従い、原風景調査を行った。ここで、調査目的が原風景の生成プロセスを詳細に検討することであるため、統計的処理に耐えるほどのサンプル数を得るよりも、数はある程度少なくとも詳しい内容を得ることが重要であることから、調査方法は、インタビュー調査が主体となるが、今回は、その上で調査方法の効率化の工夫の試みとして、アンケートを併用できる部分は適用を試みることにした。すなわち、まず以下の(1)のインタビュー調査を予備調査的にを行い、その結果を検討して(2)のアンケート調査の用紙を注意深く設計し、調査を行った。

(1) 原風景をスケッチし、その内容と想起状況、生活体験等について説明してもらうインタビュー調査(対象:東京在住の学生19人、うち男性12人、女性7人、年齢20-25歳)。

(2) 現在までの居住歴、風景体験、原風景スケッチ及びその内容と想起状況などを調査項目とする自由筆記回答形式のアンケート調査。この調査では、写真撮影(帰省の際に原風景の場所を撮影、また現在の住居周辺も撮影)も被験者自身に依頼(対象:東京在住の学生22人、うち男性17人、女性5人、年齢20-27歳。また、このうち調査(1)との重複回答者は4人)。

次に、この時点で(1)(2)の調査結果を検討したところ、転居経験のある場合にはその前後の心境変化等についてさらに詳しく調べることが原風景現象に関する考察を深める上で重要であると判断し、以下の(3)の追加調査も行った。

(3) まず簡便な予備アンケートにより、原風景に対する態度強度がある程度強いと考えられる回答者を選定。次に選定された回答者に対し、とくに上記心境変化や想起状況と頻度について詳しく聴取するインタビュー調査を行った(インタビューまで進んだのは6名、うち男性3人、女性3人、年齢22-36歳)。

以上の如く調査方法の改良工夫を試みてきたが、最後に、アンケートでは十分な筆記回答が得られなかった項目・被験者のデータなどの補強を図ると同時に、3つの調査いずれのデータも有効活用できるよう、必要に応じ適宜各調査の回答者に対し追加の再インタビューを実施し、相互の調査で項目の抜落や精度の顕著な違いがないよう不足データを補い、いずれのデータも同等に扱えるようにデータを整えた。この結果、居住歴、生活体験、原風景スケッチ、その内容と想起状況及び頻度、転居前後の心境変化等について回答が得られた合計43サンプルが、本報告での考察対象の有効サンプルとなった。次章にその内容をまとめて示す。

6. 調査結果

調査の結果得られたデータにみられる傾向を、以下、本研究の枠組みに沿い、原風景の「形成」の時期にあたると思われる体験のありよう、態度強度の強弱とそれに影響を与える要因、体験枠組みの変容の観点から整理し、先行研究の結果と比較しつつ示す。

(1) 原風景の「形成」の時期の体験のありよう

「幼少期に心に刻まれた風景が中核をなす」²¹⁾との先行研究結果と同様の傾向が、本調査においても大多数の回答者を通じみられた。その典型例としては、通学路や子どもの頃の遊び場を原風景として挙げた回答等を挙げるができる(図-1に例)。

図-1 小学校への通学路

図-2 遠足でみた眺め

また、遠足や小旅行など、一応当時の生活圏内ではあるが、毎日の生活の中ではみられないという意味で非日常的な体験がもととなった原風景も多くみられた²²⁾(図-2に例)。

また、「原風景の中核に「家」が存在している」との既往研究の結果²³⁾と同様の結果が本調査においてもみられた。とくに、帰宅途中の道で、家や家の近くのものが見えてきたときに感じる「ああ家に帰ってきた」という実感・安心感など、なんらかのストレスからの解放によって生成されていると考えられる風景を挙げた者が多かった。そして、これらの例では、毎日の生活の繰り返しの中で、帰宅時等にこのような風景生成がなされては自動化されていくことがみてとれた(後出の回答A参照)。

(2) 原風景に対する態度強度の強弱とその要因に関するデータ

地方出身者の場合、態度強度の強い明確な原風景がみられることについては、既往研究の結果と同様の結果が概ね得られ、とくに、一枚の絵として明確なまとまりを持つ実景が存在するような地形的条件の場所に育った者は原風景を生成しやすいと考えられる等の傾向が本調査によっても裏付けられた²⁴⁾(図-3に例)。

図-3 故郷の盆地の眺め

またこれに加え、実景としては地域の全体像が見渡せないような地形的条件の場所であっても、見えている断片の景観要素が地域を象徴する歴史的意味を持つなど地域の意味的まとまりがとえられる場合には回答者が強い態度強度を示す傾向があり原風景の生成が認められることを示すデータが得られた(図-4に例)。

また、帰省の際に到着する新幹線の駅などからの眺めを原風景として挙げる者が複数あった(図-5に例)。これらは、形成当時にはそれとして体験・生成したことのない風景であるが、「やっと故郷に帰った」などの強い安堵感を伴って体験・生成されることから原風景として意識され、故郷での様々な体験のインデックスとして働くという意味で故郷の地域を代表する眺めとしての機能を持つようになることがみてとれた。

図-4 家の窓からの眺め

図-5 帰省時に着く駅からの眺め

また、必ずしも、既往研究の言うように自然豊かな地方でなく、都市部の出身者であっても、遠方への転居の経験がある場合は明確な原風景の生成がみられ、逆に、以下の例にみられるように、遠方への転居経験のない回答者(例:回答A, B)は原風景についての態度強度が弱く、従って原風景が未だ生成されるに至っていないと考えられるという傾向が得られた。

回答A: 私に故郷というものはないかもしれない。それは頻りに帰るので、別になんの感慨も感じないから。あえていうなら、駅から帰る道を歩くと、田の中の一本道が通っているのだが、その風景は気に入っている。

回答B(生まれた時から24歳の現在まで転居の経験が無い者): 原風景はよくわからない。難しい。比べる風景がない...というか、今住んでいる場所以外に慣れ親しんだ場所がないから。

(3) 生活の体験枠組みの変容の観点から

今回調査で得られた43サンプルは、①転居経験がほとんどない被験者(転居が全く無い、あったとしても、同一地区内での

転居か、1年程度の仮住まいなど）6名、②転居回数が1回程度の者（典型的には大学入学時まで同一住所に住み、入学と同時に上京した地方出身者）18名、およびその他19名（様々なパターンで複数回の転居経験がある者）に分類でき、また最後の19名はさらに③転居先に外国も含まれる者6名と④それ以外13名に分類できた。以下、これを分類①～④と示すこととすると、上記（2）の結果においてもみられたように、地域の地形的特徴自体よりもむしろ、転居経験などの生活における体験枠組みの変化が原風景に対する態度強度に影響すると考えられることは、分類②の18名全員が明確な原風景を回答していたこと（うち、“一枚の絵”タイプの原風景11例、実景では一枚の絵でなくとも地域を象徴する景観要素が含まれるもの3例、遊び場など自宅周辺の近景4例。なお以上と重複し、帰宅あるいは帰省時の安堵感と顕著に結びついているもの4例あり）、また、分類①の6名中5名が明確な原風景を回答しなかったこと（3名は上記回答Bのように原風景が不明あるいは無しと回答、2名は小旅行や遠出をした時の風景を回答するも、原風景としてというよりもむしろ最近のお気に入りの場所としてとらえていると回答。なお残り1名は子供の頃よく歩いた近所の川の土手からの眺めを原風景として挙げている）からも明確に言えるものと考えられる。

また、原風景について回答しづらいと言うなど態度強度が弱く、原風景を未だ「生成」するに至っていないと考えられる者は、先の回答Bの例にもみられるように、回答しづらさの原因として比較対象が想定しにくいことを挙げる傾向があり、一方、原風景を既に生成していると考えられる者は、以下の回答Cの例にみられるように、原風景が、他の場所での風景体験における比較基準となっていると自覚的に答える傾向があった。これらは、風景とは一般に以前の風景との対比により生成されるとする、風景生成研究の既往知見²⁵⁾と合致する結果であると言える。

回答C：育った場所、ということで、何も考える基準を持たずに成長した時期が広島であり、そこで考える基準が作られていると思う。確かに埼玉も東京も“育った”という意味ではその時の環境には違いないが、そこで環境や新しい感覚を身につけるときには広島におけるものとの比較がなされているので、その点で常に首都圏で暮らしていた人とは決定的に異なっている。

また、原風景が明確であるという意味で態度強度の強い者の中にも、原風景を強い感情を伴い想起する者とそれほどでない者がみられた。このうち、例えば「(故郷を離れた現在の環境が)嫌だ、ストレスを感じる」「(故郷に)帰りたくて仕方ない」等、感情的内容を含む回答をする者は、原風景の地で過ごした期間が長く転居回数が少ない者（分類②）、それもとくに転居から間もない者に多く、一方、転居回数の多い者（分類④）は感情的な回答をする者は少なく、原風景について淡々と答える者がほとんどであった。

またこの他、外国居住経験者（分類③）が、母国と外国の両方にそれぞれ原風景があると答えている回答例が複数得られた（6名中3名）。これらは、それぞれ態度強度の強い、明確な原風景であったことから、複数の原風景が生成された例であると考えられる。

7. 原風景の「形成」プロセスに関する考察

調査結果の（1）でみてきた傾向から、原風景の場所は、一種の非日常的体験あるいはストレスからの解放などを契機に、当時は当時なりの（この時点では、原風景としての風景生成ではないにしろ）なんらかの風景生成がなされた場所であると考えられる。また、帰宅時の風景の場合に顕著のように、いったん生成された風景も、日常生活の中で自動化されていき、その結果、生成と自動化を何度も繰り返すものと考えられる。

以上よりまず、原風景の「形成」の過程とは、風景の生成と自

動化を繰り返す過程であると考えられるが、ここで、先に2.で確認したように「自動化」の現象は、「身体化」でもあるという側面を持つことから、さらに考察すると、次のようにとらえられよう。すなわち、生成された風景が繰り返し「自動化」されるということは、風景として意識されなくなっていくということである。しかし一方、「身体化」という機能に着目して考えると、それは、その場所の環境になじんだ身体を獲得していくことであると考えられ、よって、繰り返し「身体化」が起こることにより、体験者はその場所といわば一体化していくものと考えられる。すなわち、生成された風景が繰り返し「自動化」していくことは、体験者がその風景を喪失してしまうことではなく、むしろ、繰り返される「身体化」によって、心身ともにその風景となじみ、自己がその場所と一体化していく過程であると考えられる。

以上の考察を、調査結果にみられた、原風景を未だ生成していない回答者の例と照らし合わせて考えると、この時点で原風景がそれとして生成されにくいのは、体験者がまだ原風景の「形成」時期の中にいる間は、以上述べてきたようにその場所が自己と一体化していて切り離し難く、そのために、この時点では原風景として対象化されにくいからであると解釈できる。

また一方、これに加え、この時点で原風景が対象化されにくい原因の他の一因として、調査結果の（3）でもみてきたように、形成期の体験が、対比の対象となるような風景が他にない状態での体験であることが挙げられよう。このことと、風景が一般に以前の風景との対比により生成されると考えられることをあわせて考えると、原風景が他の風景と区別されるのは、対比の対象となるような風景がほとんどない状態で、いわば純粋に体験した場所での体験を素材に生成された風景であるという点にあると考えられる。つまり、原風景の「形成」期の体験とは、単に幼少期の体験であるというよりも、比較基準がほとんどない状態での体験であることが特徴的であると考えられることができよう。

このようにとらえると、外国居住経験者が複数の原風景を生成したと考えられるという結果は、生活における基準や体験枠組みが極端に異なる地においてはそれぞれに原風景が生成されることがあることを示す例であると考えられる。

8. 原風景の「生成」プロセスに関する考察

調査結果から、転居等により異なる環境に身を置くようになることが、原風景の生成の大きなきっかけとなることがわかったが、ここでは、それがどのようなメカニズムによるのかについて考察するため、再度、より詳細に結果をみていく。

まず以下にみる例は、大学入学と同時に上京するまで沖縄で育った回答者であり、地方出身者が明確な原風景を持つというケースの典型例とも言えるようなケースである。

回答D：東京に来た当初は、見晴らしがなくて非常にストレスを感じた。(中略)両親の実家のある場所は、畑が広がって手つかずの海があった。(中略)そこでは高台から見下ろした時の景色が好きだった。マッチ箱のような家々と広がる海。夜になると遠くの灯台の光が見えた。

上記を始めとするこの人の回答内容を総合すると、この人にとっては、広い見晴らしとは、わざわざ旅に出て見に行くようなものではなく、生活の中であってあたりまえのものであったという。そのため、上京と同時に突然、日常的には広い見晴らしが得られないような環境に身を置くことになったことは、この人にとって大きな環境の変化であると言え、そして、この「見晴らしがない」というストレスが、この回答者にとって原風景を生成するためのきっかけになったと考えられる。このように、街のなかの見通し・見晴らしの視距離の違いなどが原因と考えられるストレスを、転居直後に強く感じたという回答者は、原風景に対する態度強度の

強い回答者に複数みられ、このことから、原風景の場所の地形的特徴自体というよりもむしろ、原風景の場所と転居先の場所との空間構造の差異がもたらすストレスが、原風景の生成の契機として働くものと考えられる。

また、以上より、原風景の生成につながるための形成過程の役割について考察すると、それは、長期間をその地で過ごすことにより、その地の空間特性が身体化し、知覚に慣れが生じたり、居心地よく感じるようになることにありと考えられる。つまり、原風景の形成過程は、環境に対する「かまえ」が固定されていく過程としてとらえられ、そして、一旦かまえが固定されてしまうと、そのかまえでは快適に生活体験ができない場所では、そのストレスにより原風景の生成が起こりやすい、と考えることができよう。

以上の考察を、再び調査結果と照合してみると、転居のない場合は原風景の生成がみられない場合が多いという結果が、かまを大幅に修正する必要がなかったためと解釈できること、また、原風景について感情的に答える者が、転居回数の多い者に対し少ない者、また転居から間もない者の方が多かったという結果が、かまの固定しやすさとその保持状況の点から説明できることから、この、かまと環境のずれによるストレスは、原風景が生成される契機の一つとなるととらえてよいであろう。

さて一方、以上の説明のほかに、転居が原風景生成の契機となりやすい原因は、転居ということが、原風景の場所と物理的空間的に離れ、時間的にも「引き」をとることになるため、それまで一体化してきた場所が「対象化」しやすくなるからではないかと考えることもできる。以下では、このことについて検討してみる。

まず、先ほどの回答Dの例では、回答者は原風景として両親の実家のある場所を挙げている。つまり、日常生活の中ですっかり自動化してしまっている環境でなく、当時においても、そこを訪れることが遠足や小旅行程度の非日常性はあるという場所が原風景の場所となっており、当時は当時なりの風景生成がなされた場所であると考えられる。そして、その場所において何度か生成されたであろう風景群（場所としては同一であっても生成の度に少しずつ違う様相であったらう風景群、あるいは少しずつ違う場所で生成された風景群）が、原風景として生成される際にはひとつに束ねられ、先の回答のような形で、故郷の様子を最も代表する眺めとしての「原風景」となって生成されたものと考えられる。またこの他、調査結果の（2）でみてきた、帰省の際に到着する駅からの眺めなどが故郷の場所全体を代表する眺めとして働き、原風景として挙げられる例においても、それが故郷のインデックスとして働いていることから、これらの例においても、それまでその内部に居たがために特にまとまりをもって意識されることがなかった個々の場所が、故郷というひとつの場所として束ねられることにより原風景が対象化されることがみてとれると言える。また、より顕著に以上のことを自覚的に答えた回答例もみられた。回答E：広島にいるときは別に故郷なんて感じたことはなかった。

すっぱー街中に住んでいたもんで(中略)。だけど東京に住み始めてから感じるのは故郷は広島って街全体なんだなっていうこと。新幹線で帰省するとき広島駅に近くにつれて、いろんな思い出のあるものが見えてきて、“あー、帰ってきたんだな”そんな感じになる(中略)。街中でも、友達の家、小学校、幼稚園、公園、電話ボックスや自販ひとつでも、心の底に残っているものはすべてひっくりめて故郷の要素群なんだろう。

この回答者は、それぞれの「思い出」が作られた時のそれぞれの体験において、それぞれの風景を生成してきたのであろうが、それらが「全てひっくりめて」束ねられ、原風景となっていると言っている。この例からも、原風景の生成において対象化されているのは、個々の対象物や記憶の中の風景そのものであると言うよりも、むしろ自分が以前一体化していた場所全体であり、場所が核

となることによって、原風景はあるひとつのまとまりとなり、ひとつの風景に束ねられると考えられよう。

この他にも、調査結果の（2）においても報告した通り、原風景の場所が全体像を見渡せる地形的条件を有さなくても、意味的に地域のまとまりをとらえられる場合には後に原風景の生成がみられる傾向があることから、原風景は、必ずしも実景や体験当時に生成された風景と合致しなくとも、場所が核となり、ひとつの風景として束ねられ生成されるものと考えることができよう。

以上のように、場所が核となって原風景がひとつの風景と束ねられるという原風景の生成メカニズムを「場の束ね」と呼ぶことにすると、その機構は図-6のような模式図で示すことができる。また、時間軸上では、当時の体験においては、風景の生成と自動化はそれぞれある時間間隔でなされたであろうが、原風景の生成は、そのように生成された風景群を、稠密化して束ねあげるような生成であると考えられる。

図-6 「場の束ね」による原風景生成メカニズム

9. 原風景の形成・生成および自己アイデンティティ保全の機構

ここまでの考察で、長期間を過ごした場所から転居した場合、それまでの固定したかまでは新たな環境に対処できないというストレスが生じるが、その時、最も居心地よく過ごすことのできた場所が核となって原風景が生成されるというメカニズムが確認された。このことから、原風景の成立のためには、その形成過程および生成過程の両方が必要であり、「形成」の過程を経たものであるからこそ「生成」の契機が与えられるものであると言えよう。ここでさらに、その場所に対する居心地や感覚を手がかりとして場が束ねられることに着目し、これを「感覚の束ね」と呼ぶことにすると、原風景の形成から生成へのメカニズムは、次のように説明することができる。すなわち、かまが固定し、身体を感じ方が慣性化している体験者が、新たな環境で感じる感覚の違和感により、最も居心地のよかった場所での感覚を比較基準として自覚し、それにより、当初はまとまりがなかった故郷の地が経験のまとまりとして束ねられるという、「感覚の束ね」を通じた「場の束ね」の機構である（次ページ図-7の模式図の左下部分参照）。

また、原風景は、これまでも自己アイデンティティとの関わりのもとに語られることが多かったが、本調査結果から言えるのは、原風景の生成をきっかけに、自己アイデンティティがむしろ後から確認されるという機構である。すなわち、上でも述べたように、原風景の場所は、風景の生成と自動化を繰り返すことによって身体化し、自己と一体化した場所であると考えられ、よって、原風景の場所の環境から受ける刺激によって空間の特性に従った身体を感じ方が培われることが、原風景現象の生じるための条件であると考えられる。また、原風景は、比較基準がない状態で体験されたという意味で純粋に体験されたと考えられることも先に確認したが、他に比較基準がないからこそ、その場所で培われた

身体性が自らの身体の感じ方の基本となると考えられよう。そして、故郷での生活の様々な場面で味わった感覚が故郷という場所を核に束ねあわされる際に、その場所での感じ方になじんだ特性を持つ自らの身体のあり方が自覚され、それが、本来の自分の姿、すなわち自己アイデンティティの核として自覚されるものと考えられる。このことを「身の束ね」と呼ぶことにすると、原風景の成立メカニズムは、「感覚の束ね」を通じ「場の束ね」が起こることによって説明され、そこにおいて場が束ねられると同時に身が束ねられるという自己アイデンティティ保全の機構もみられると言えよう（図－7）。

以上より、原風景とは、単なるノスタルジーではなく、ものを見る枠組みの転換がそこにみられることを、データに基づき確認できた。

図－7 原風景の成立メカニズム

10. まとめ

（１）転居等を契機に新たな環境に置かれた体験者が故郷の風景を「原風景」として生成する現象について、態度強度に着目した調査および分析を行い、原風景の成立プロセスとそのメカニズムについて、説明に必要な「原風景の形成」「原風景の生成」等の用語を提案して補いつつ考察・説明した。

（２）原風景の形成とは、生成された風景が繰り返し身体化されることにより、自己とその場所が一体化する過程であり、かまえが固定していく過程として考察された。また、比較基準がない状態で体験されることが特徴的であることを指摘した。

（３）原風景の生成は、典型的には転居を契機に、それまで住んできた場所全体が対象化される過程であり、その際、転居が契機となりやすいのは、空間的・時間的な引きが与えられることによる「対象化のしやすさ」とともに、それが生活におけるかまえを大幅に修正する必要を生じさせるという「ストレス」が原因であると考えられることが考察された。

（４）原風景の形成から生成に至るプロセスを考察し、原風景の成立メカニズムは、「感覚の束ね」を通じ「場の束ね」が起こることによって説明され、さらに、そこにおいて場が束ねられると同時に身が束ねられるという自己アイデンティティ保全の機構もみられることを確認した。

補注及び引用文献

- 意味はテキストとテキストの関係性において産出されるという意味生成の記号論（クリステヴァが提示した間テキスト性の理論）から「生成」の用語を採った。風景生成研究の既往研究としては、吉村晶子（1998）：『東関紀行』の分析を通じた動態的風景記述モデルの構築：ランドスケープ研究 61(5)、675-680 などがある。
- 「自動的処理」とも呼ばれる。箱田裕司編（1993）：認知科学のフロンティアⅢ：サイエンス社などを参照。

- 村田純一（1995）：知覚と生活世界：知の現象学的理論：東京大学出版会参照。
- 芸術作品を対象とする場合は「鑑賞」であるが、ここでは対象を広く自然等も含めているため「観照」とした。この用字は谷田部康幸（1992）：美術の鑑賞とその望ましいありかた：国士舘大学文学部人文学会紀要 25 を参照した。
- 異化 estrangement、前面化 foregrounding とも呼ばれる。Winfried Nöth（1990）：Handbook of Semiotics: Indiana University Press 等を参照。
- アラン・ロジェ（1995）：風景と環境——その「言分け理論」をめぐって：SD1995 年 4 月号参照。
- カントの言う無関心性。佐々木健一（1995）：美学辞典：東京大学出版会の「美的態度」の項などを参照。
- 一般に「態度」の概念は、長期わたって持続される反応傾向を指し、一時的な構えとは区別される。一方、「構え」の用語は、「個体が、ある特定の状況に対して予期をしたり行動の準備状態をとることや、認知や反応の仕方にあらかじめ一定の方向性をもつこと」（外林大作ほか編（1981）：誠信心理学辞典：誠信書房）を指し、「一時的なものあれば長期にわたって個体の情報処理に影響するものもある」（中島義明ほか編（1999）：心理学辞典：有斐閣）とされていることから、風景現象を動態的にとらえるにあたって有効であると判断し、用いることとした。ひらがな表記するのは、「構え心理学」の分野における狭義の定義と区別するための用心である。
- 勝原文夫（1979）：農の美学：論創社）は、純粋個人の原風景の他に国民的原風景が存在するとし、また、進士五十八（東京農大造園学科学院造園学・造園学原論研究会編（1996）：原風景の研究：東京農業大学出版会）はさらにこれに加え人類レベルの原風景を想定するが、本稿で扱うのは個人の原風景に限る。
- 高橋義孝（1978.11）：原光景と原風景：思想 653、27-35 参照。また、①および②は、茂原朋子（1991）：青年の「原風景」の特性と構造に関する研究：日本都市計画学会学術研究論文集 26）が先行研究の成果として認めている。
- 関根康正（1982）：原風景試論：季刊人類学 13(1)、164-193
- 原風景のようなものを対象とし「態度強度」を適用することに疑義があるかもしれないが、少なくとも、「対象への評価がすでにはっきりしており、質問されれば瞬時に答えることができる」者と、「対象への評価がまだ定まっておらず、答えるのに時間がかかる」者が存在することは関根も指摘している通りであり、以上は態度強度の指標である「態度のアクセスビリティ」としてとらえられる（以上引用部分は今城周造編著（1993）：社会心理学：北大路書房より）。また、態度の内容とともに強度を分析することは、調査に伴うバイアスを修正するのに有効であるとされているが、実際、今回の調査でも原風景が不明確な回答者に複数回面接するとその度に違う風景を答えたケースがあり、原風景を対象とする場合にもこのような強度に着目することが調査結果をより評価できるものになると考えられ、以上より「態度強度」の用語においてとらえることとした。
- 星野命・長谷川浩一（1985）：青年の「心の風土」としての原風景：学会連合日本の風土調査委員会編「日本の風土」所収：弘文堂が、「幼少期の体験に…明快な記憶と積極的な意味づけをしてくれる」ことを期待して保育科等の学生を調査対象に選んでいることにみられるように、多くの研究者たちが態度強度の強弱の問題があることを認識していることは認められる。しかし、この強弱の問題こそが現象の様相を示す一要素であると考え扱うものはない。
- 星野命ら前掲論文参照
- 井上佳明（1995）：原風景の心理学的研究：鹿児島大学法文学部紀要 41
- 奥野健男（1972）：文学における原風景：集英社
- たとえば関根は前掲論文で原風景を「未来に向かって保持し、追い求めようとする今の心に生きている風景である」としており、その未来性を積極的に取り上げて論を展開している。
- 井上佳明前掲論文における原風景の定義に含まれる。井上は先行研究の検討を行いそれに基づき原風景の定義を行っている。
- このことは井上佳明（前掲論文）が指摘している。
- 「造園用語辞典」（東京農大造園学科編（1985）：彰国社）の「原風景」の項（p.173、進士五十八による）では、「幼少年期（7-8 歳ごろまで）ならびに思春期（20 歳前後）」とされている。
- 関根康正の前掲論文参照。関根は、彼の調査で得られた原風景のデータを 7 つの要点によりよく分類整理しているが、これはそのうち「要点 2」に該当する。
- 関根康正の前掲論文では、要点 3 として「自然のうちに思いがけず見た不思議、恐怖の風景が強く心をとらえる」が挙げられているが、本稿の調査結果では不思議や恐怖というほどの感情や強い非日常性のみられる結果はなかった。
- 関根康正の前掲論文の要点 4 である。
- 関根康正の前掲論文の要点 1 である。
- 前掲吉村晶子（1998）参照